山本覚馬先生 新島八重夫人 生誕の地

宮崎 十三八

生誕碑の誕生

平成元年五月三十日午前十時から、会津若松市米代二丁目一―二三の私宅の門前で、「山本覚馬先生・新島八重夫人の生誕碑」の除幕式がキリスト教式に挙行されました。

松山義則同志社総長さんはじめ京都から十数名の先生方がおいでになり、学校法人同志社として正式に建立されたのですから、私宅としては名誉このうえないことで、家族一同非常に緊張してこの朝を迎えました。

私宅の細い道路をおいた向い側は、八百坪ほど広い空地になっています。その一角に白いテントを二張り張って、椅子を五、六〇席設け、門前にできたばかりの生誕碑の前には花束が飾られ、石塀の前にもベゴニヤの花が植えられるなど、いつもとちがって美しく飾られた門前には百人ほどの人が集まり讃美歌のコーラスとともに除幕式が始まったのですから、近所の人たちは何事かと、驚いたにちがいありません。

折しも門前の赤松は新緑の葉が緑色を引立てていましたし、松陰からはちようど盛りの「コンフィダンス」というつるバラが花をのぞかせていましたので、式前に降ってきた小雨も僅かで止んで、天上の覚馬先生や八重夫人も微笑んでいるように思われました。

碑は台石ともで高さ約一メートル、会津磐梯山を思わせる形の蛇紋石に

山本覚馬
新島八重　生誕の地

と格調高い行書体の文字で刻まれ、その左には、新島八重の直筆の歌

明日の夜は
何国(いづこ)の誰か
ながむらん
なれし御城に
残す月かげ

八重子

が記されました。また裏面は松山総長撰文による山本兄妹生誕碑の由緒が刻まれています。

新島襄生誕碑と山本家

この碑が建立されるに到りました経過を少し申しあげますと、私は数年前東京神田錦町で「新島襄生誕碑」に偶然出会いました。

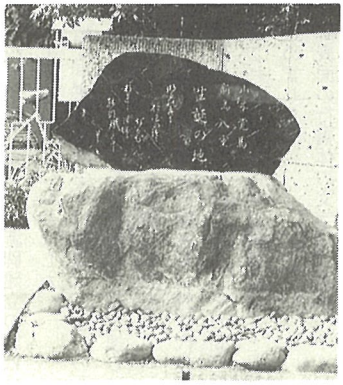
その日は私の次男の結婚式で、早くから神田の学士会館の式場へ出かけましたが、花婿の父としては待機時間をもて余して、あの付近を散歩していましたところ、学士会館の南側にあの生誕碑を見つけたのです。

新島襄先生がこんな処で生れたとは、ハテナと思いましたが、説明板を読んで納得がで

きました。

新島襄先生の父は安中藩士（群馬県）でしたが、安中藩江戸屋敷がこの神田錦町にあって、当時の江戸勤務の藩士は家族同伴でこの屋敷に住んでいましたので、襄先生も天保十四年（一八四三）一月十四日、この地で生れた旨が書いてありました。

この新島先生の生誕碑を見てから、私の心は山本覚馬・八重兄妹生誕碑を夢想するようになりました。同志社の創立者が新島襄先生であることは有名ですが、襄先生一人で創立されたのではなく、山本覚馬という同志が創立に協力したから同志社が生れたのであり、新島夫人となった妹の山本八重も創立者の一人と言ってよいのでしょう。



建立された生誕の碑

そうならば新島襄生誕碑のつぎには、山本覚馬兄妹生誕碑も建立されるであろうし、また私単独でも建てねばならないと思いました。

それは私の今住んでいる家が昔の会津若松城下郭内の米代四ノ丁にあって、ちょうど山本家が建っていた場所に当ることを知っていたからでした。

私が今の場所に住居を定めたのは、昭和四十三年のことですが、それまで田圃だったところを埋めたてて小さな家を新築したものですから、当時はそのような由緒の地とは知らないで移り住んだのです。

その後間もなく郷土史編集に関係していましたので会津若松城下の古い地図を見る機会があり、私宅のところは、天保年間の地図では「山本権八」、慶応年間の地図では「山本覚馬」と表示してありまして、兄妹の生誕地であることを知ることができました。

こうして私宅のある場所が山本兄妹の家のあった跡とわかりますと、東隣は伊東左大夫という藩校日新館の漢学の先生宅で、そこの息子の悌次郎は、隣の八重姉さんから南向いにあった角場で、鉄砲の撃ち方を習っていたことを私は思い出しました。八重姉さんは藩の砲術師南の娘だけあって、女ながらも鉄砲の名人といわれていたそうです。悌次郎は後に白虎隊自刃十九士の一人となります。

悌次郎は何度練習しても、なかなか上手く撃てません。実弾を撃つときの轟音を気にして、引金を引く前にどうしても眼をつむってしまうので、弾丸は的に当らないことが多いのです。そのたび毎に

「おくびょうもの！」

「眼をつぶってはダメッ」

と、八重から叱られてばかりいました。

こんな光景が私宅から東隣を見ていると思い浮ぶのでした。

読み易い碑文を

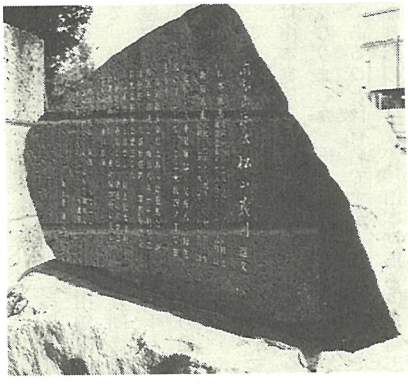
このようなときに、昭和六十三年秋、山本覚馬の遺跡を訪ねて会津若松市においでになっていた同志社総長松山義則先生ご一行が私宅に来られました。私は率直に兄妹の生誕碑を設けてほしい旨を申しあげました。

総長先生は熱心に私の話を聞いてくださり、そのときはそのまま帰られましたが、その年の暮には同志社々史資料室長の河野仁昭

先生が再び来宅され、生誕碑建立の話はいよいよ実現することになりました。

私は早速河野先生とご相談し、市内の石万建設という石屋さんに依頼して石を捜しに歩きました。幸いにも蛇紋石の光沢のいい石が少し小ぶりでしたが石屋さんの先々代の頃から保存されていたものがあり、その間何度か来宅された河野先生や施設課長さんと具体案を進めました。

碑表面の行書体の文字は、東京マール社発行の王超鷹・馬放南共著『新行書体』というデスプレイ書体の本から、一字ずつ拾って採用しました。



碑陰

また八重が戊辰戦争の鶴ケ城籠城戦落城の前夜、城内の白壁に簪（かんざし）で刻みつけたという「明日の夜は――」の和歌は、会津では非常に有名ですので、河野先生のご提案により、同志社に遺されていた八重直筆のものを入れることにしました。この方が単なる生誕碑よりも文学碑らしい味が出せると、二人の意見は一致したのです。

しかし八重の直筆は余りに達筆で、現代人にはとても読めませんので、裏面に明朝体の読み易い文字でこの歌を再録し、同時に松山総長さんに撰文をお願いして、簡単に兄妹出生の由来を書いていただきました。

これらの裏面の文字は、総長さんのサイン以外は、八重の和歌の読解同様、横太明朝体を用いました。これは同じくマール社発行の杉山金三著『横太明朝体』というレタリングの本から一字一字拾って採用したものです。

その理由は、少くとも百年後、いや数百年後でも、また現代でも最も多くの人から親まれ、読める文字は、明朝体であると信じたからです。

また私宅の門前の石塀の一部を手前に移動する工事をして、碑を建立する敷地約一坪を設け、台石も石屋さんとあちこち歩いて適当な庭石を造園業者の石置場から見つけ、運んでもらいました。

こうして生誕碑が誕生しました。

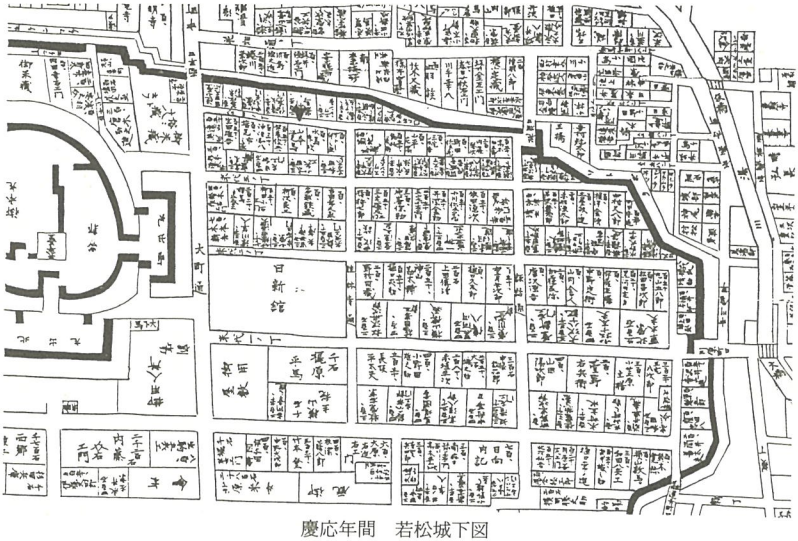
会津藩の山本家

順序が逆になりましたが、最後に山本兄妹の会津時代に触れますと、

山本覚馬先生は、文政十一年戊子（一八二八）正月十一日、会津若松城下、米代四ノ丁に生れました。ライトハウス社『山本覚馬伝』では「土手内の屋敷で生れた」、浜岡光哲氏の『山本覚馬翁略伝』では「会津城郭内」とあります。

会津若松城下は、蒲生氏郷が城主時代の文祿二年（一五九三）頃、それまで城北を東から西に流れていた車川という川を堰き止め、東山溪谷（東山温泉のある溪谷）から流れ出る水は城南を流れる羽黒川（現湯川）一本にし、車川跡を外濠とする土手を東―北―西と廻わして城の外郭としました。

これが蒲生氏郷の城下町設計の基本ですが、外郭内を郭内と称して全部武家屋敷のみとし、郭外には町人（職人・商人）のための城



慶応年間　若松城下図

下町をつくつたといわれています。

つまり「土手内」とか「郭内」というのは鶴ケ城（会津若松城）の廻りの武家屋敷街で、非常に広い範囲を指し、その南端にあるのが米代四ノ丁なのです。

つまりこの米代四ノ丁は城の南西三百メートルの距離ですから、徒歩五分で西出丸の濠に達します。

また前書には山本家の扶持「禄は極めて薄く十人扶持」とありますが、父の権八は百五十石で、息子の覚馬も成長して軍事取調大砲頭取となりましたので、その役料として拝領した十五人扶持が誤り伝えられたのではないでしょうか。

つまり郭内は上中級武士の住宅街で、下級武士は郭外にいました。従って山本家は会津藩中級武士であったと言ってよいでしょう。

まだまだ書きたいこともありますが、今回紙数はつきましたので擱筆します。（歴史家）

会津・こころの郷里

若月健悟

はじめに

郷里会津若松の友人宅に遊んだ幼い日の頃を思い起こすとき、今でも鮮明に思い浮かぶことがある。それは、真黒い柱の一隅が深く削り取られた跡である。「これ刀傷なんだって」と友人は話してくれた。今からおよそ百二十年前、会津戊辰戦争で戦場となった城下町に残る数少ない武家屋敷には、今日でも戦闘の傷跡を偲ぶことができる。

恐る恐る、傷跡に触れると、会津武士の無念の叫びが幼い私のこころにも聞こえてくるような思いであった。

会津と京都

往時を偲ぶことができる城下町も、年々開発が進み、次第に都市化して行く中で、幼い日に目にすることができた「時代」が消えて行くのは、止むを得ないことなのだろう。

一九八二年八月一日、「同志社新島研究会」主催により、地方講演会が会津若松で開催された。「山本覚馬先生召天九十周年記念」事業の一環、とのことであった。郷里に戻っていた私にとっても、会津と京都との絆が強まることを願い、地元の郷土史家の方々の協力を呼びかけて当日を迎えることができた。

会津において、山本覚馬・八重兄妹に関心を抱かれる方は多くはない。戊辰戦争後、山本家が京都に移り住んだことは、会津との関わりを稀薄にさせている。それに焼土と化した会津には、研究対象となる第一次資料を欠いていることも、会津と山本家との関わりを見えにくくしている。

こうした中で開催された講演会に、四十名近く参集されたことは、一つの慶事であったことと思う。

同年、同志社新島研究会発行の『新島研究』に、山本家ゆかりの遺跡等につき原稿を依頼され、人づてに会津一円を踏査することになった。

今に残る山本家ゆかりの遺跡

直接山本家に関わる遺跡を辿って行くと、三カ所が明らかになった。山本覚馬・八重兄妹の生家跡、覚馬・八重の父山本権八の墓、山本家菩提寺に残る墓の三カ所である。（『新島研究』第六四号の拙文を参照していただけると幸いである）。

覚馬・八重兄妹の生家跡は、郷土史家宮崎十三八氏の敷地であることが判明し、宮崎氏のご好意によって、京都・同志社との関わりを深める弾みとなった。会津のお城「鶴ケ城」とは本の目と鼻の先で、山本家の人々は、終日お城を仰いで過していたことを彷彿とさせる。それに、お城の西側を走る道路は、大町

通り（旧日光街道）として往来の激しい主要路であり、覚馬・八重兄妹は、一日幾度となく通ったのである。今日、山本家を偲ぶ面影は、会津戊辰戦争を免れた幾つかの屋敷にわずかに見られる程度であるが、覚馬が幼い日よりよく川遊びした大きな川、湯川は、昔も今も、豊かな水量をもって南方すぐ近くを流れている。

山本覚馬にとって会津時代を大半過ごした「会津藩校　日新館」は、覚馬を育て、覚馬を世に送り出した精神的母胎であった（『新島研究』第六六号の拙文を参照。）覚馬の家から北へ二丁行ったところに日新館があり、千人に及ぶ藩士の子弟が学んだのである。十一歳から十八歳までを文武両道に亙り伝授され、「大君の義、一心大切に忠勤に存ずべく」（会津藩祖　保科正之の精神を示す『家訓十五条―其一』）と、「大君」即ち将軍への恭順をもって会津武士の志としたのである。覚馬は、二十九歳の折、日新館教諭となり、蘭学所設置を実現してその教授の任に当たった。藩主に従って上洛するまでの八年間は、覚馬にとって会津時代の最も充実した日々を過すこととなった。三百にのぼる藩校中屈指と称賛された日新館は、東西百二十間、南北六百間に及ぶ大校舎であったが、今日、往時を偲ぶ遺構は「天文台跡」のみである。

山本権八の墓
（一ノ堰の光明寺内）

覚馬・八重の父山本権八の墓

山本家に関わる第二のゆかりの遺跡は「山本権八の墓」である。山本家には、家督を継ぐ男子に恵まれなかったこともあり、娘佐久の婿養子として永岡繁之助（永岡家四男）が山本家に入ることとなった。永岡家は、山本家とは通りを隔てて右隣り四軒目にあり、その交流は親密度を深めていた。家督を継いだ繁之助は「権八」の名を継いでいる。覚馬・八重兄妹は、山本権八・佐久の長男・長女として誕生した。

山本権八は、会津戊辰戦争にて、敗戦（開城）直前に戦死している。権八は六十一歳となっていたため、会津藩軍制では「玄武隊」（五十歳以上）に配属された。老齢の権八にとっては、老骨に鞭打っての奮戦であったろう。敗戦を繰り返しながら、明治元年（一八六八）九月十七日、お城から六キロメートル南下した、一ノ堰の戦いで権八は絶命した。開城はその五日後の二十二日である。

勝者西兵は、会兵戦死者の火葬、埋葬を許さなかったため、屍体は野曝しのままであった。正式に埋葬許可が出されたのは、明治二年（一八六九）二月二四日のことであり、山本権八が埋葬されたのは、それから数カ月後のことである。一年近く野曝しとされたことを思うと、勝者にとって会津がいかに強い憎悪を抱かせたかが理解できる。

会津戊辰戦争にまつわる悲話は、会津の歴史そのものと言える。新島襄と結婚した八重は、一八八七年（明治二十）夏、夫襄の静養に同行して北海道を訪れている。札幌滞在中のお世話をした内藤兼備の妻ユキは、旧姓日向と言い、会津出身であった。八重にとってユキとの出会いは、積年の思いを分かち合える「戦友」との再会でもあった。ユキの父日

山本家の墓（山本家の菩提寺、臨済宗宝雲山大竜寺内）

向左衛門は町奉行として参戦し、ユキの兄共々戦死している。ユキはこの時十八歳、娘子隊で活躍している。敗戦後の翌年、ユキは家紋のついた羽二重の着物と上アゴの腐乱死体を竹やぶで発見した。家紋からユキは、その人物が割腹して果てた父に違いないと確信した。「身内の者の血を骨につけるとにじむというので、娘のわたしが指先を切って血をつけてみましたら、よく滲み込むではありませんか。その時は、神仏のお引き合わせと手を合わせたのでございます」とは、ユキの晩年の述懐である（北海道新聞、一九八七年四月十五日付夕刊掲載記事より）。ユキにとっても、八重にとっても、戦争の悲惨さはこころの奥深くに刻み込まれた焼印であった。こうした悲話は、国家老西郷頼母一族二十一人の壮絶な自刃、十六、七歳で構成された、白虎二番士中隊員十九名の自刃（二十名中一名が生存し、その状況が判明した）など、今日に至っても、会津では語り継がれている。

現在、山本権八の墓が建っている一ノ堰の光明寺は無住のお寺である。一ノ堰の戦いで戦死した四十七名は、大きな塚に合葬されている。今日残る山本権八の墓は、それ以降に建立されたものであり、五基ある墓石の一つとして、静かに佇んでいる。村人たちの集会所でもあり、子供たちの遊び場となっている光明寺境内は、いつも奇麗に清掃され、お墓もよく管理されている。村人たちの好意に応えるためにも、関係筋の手立てが待たれる。

山本覚馬・八重兄妹生誕碑建立

山本家ゆかりの第三は、山本家の菩提寺「臨済宗宝雲山大竜寺」である。

大竜寺は、羽州最上より会津へ移封となった保科正之に随従した御供寺であり、寛永二十年（一六四三）の開闢である。お城より北東へ三キロメートルのところに位置し、小高い山並みの中腹にある。一キロメートル北には、会津戊辰戦争悲話の一つとして語り伝えられている「白虎隊士十九名」の自刃の山、飯盛山がある。

大竜寺をお訪ねした折、住職増子大道師に山本家のお墓について懇切に説明いただいた。

山本家の累代のお墓は、元来定まった墓所に並べられたのではなかった。散在していた墓石が、前住職により本堂前の一隅に集められた。折しも、会津藩礼法の祖、小笠原長時歿後四百年忌に、小笠原家墓所の大改修が行われ、隣接していた山本家の墓石は、無縁の墓として再び移設されることとなった。無縁とはいえ、会津藩史にその名をとどめる山本家を無縁仏として遠のけるには忍びず、苦慮の末、墓所の北隅の一角に、山本家の墓石七基が移された。左隅には、八重の手になる「山本家之墓」との石碑が建てられている。八重

が亡くなる一年前の建立であり、その経緯は不明であるが、京都在住の八重が大竜寺に石碑建立の依頼をした、と考えられる。増子住職にも、その辺りは不明とのことである。

大竜寺に残る過去帳には、山本家十二番目に「覚馬娘　妙了童女　万延元年（筆者注・一八六〇）十月十二日」と記載されている。覚馬の長女「峰」はその前年に誕生している。「妙了童女」は次女として生まれ、間もなく亡くなった、と思われる。覚馬にとって、妻宇良との最も充実した会津時代を彷彿とさせる。

大竜寺のご好意によって、山本家の背景が墓碑と過去帳から伺われたが、私自身、この折に、山本覚馬・八重兄妹を顕彰するものが欲しい、との思いを強く抱いた。新島研究会の方々の熱意と共に、会津と京都とを直結する顕彰碑は、百二十年近く顧みられることがなかった、同志社創設の恩人であり、良き協力者であった、山本覚馬・八重兄妹に対する私たちの感謝の記念碑となるべきものであった。

一九八三年五月七日、京都・同志社で開催された「山本覚馬先生召天九十周年記念の集い」に始まり、各種の研究会の展開、同志社校友会福島県支部発足のために、同志社理事長室長の木村健二氏と佐川正暁氏の来会を受け、更に同志社社史資料室長の河野仁昭氏の来会と、同志社の対応が急速に進められて行った。

一九八八年秋には、同志社総長の松山義則氏をはじめ関係者の来会の運びとなり、「生誕碑」建立は決定的となった。この時には私は、会津を離れていたが、同志社の熱意と、会津の郷土史家のご好意とが相俟って、「生誕碑」建立へと進められたことは、郷里を会津に持つ同志社人にとって、これ以上の喜びはない。

おわりに

一九八九年五月三〇日、山本覚馬・八重兄妹生誕の地に「記念碑除幕式」が行われ、地元より会津若松市長を初め、多くの方々が参列された。殊に、敷地をこころよく提供された宮崎十三八氏のご厚意、会津と京都とを結ぶ、強い絆となったことは忘れ難いことである。

一九八二年八月、新島研究会の森中章光氏を初め五名の方々が、会津の地において「山本覚馬先生」講演会を開催されて七年の歳月が流れた。多くの方々の熱意と祈りとが、ようやく、覚馬と八重のふるさと会津に花開いたことにより、今後の研究に一つの布石となることを期待したい。

今後の顕彰として、地元会津若松と京都・同志社が、一ノ堰光明寺、大竜寺の墓地に関連の碑を建立されることになれば、一層、会津と京都との距離感は縮まり、山本覚馬・八重兄妹はもっと身近な存在として、多くの人々のこころをとらえるようになるだろう。

会津戊辰戦争後、すっかりとり残されて来た会津一円の開発が急速に進められている。田園地帯も、次第に宅地化され、工業団地として様変わりする地域も現われている。会津発展のためには必要不可欠な開発ではある。このような今日こそ、こころの故郷として、広く深く、山本覚馬・八重を育んだ会津を紹介し、理解することが、京都・同志社にとっても、有益であることを思う。一層のご尽力を切に願うものである。

（一九七五（昭和五十）年大学神学部卒業・一九七七（昭和五十二）年大学院神学研究科博士課程前期課程修了
日本キリスト教団　筑波学園教会牧師）

新島八重夫人のお雛様

富沢玲子

同志社時報（第八十一号）のインタビュー・ルームで、武間冨貴夫人が新島八重のお雛様のことにふれておられ、非常に興味深く読ませていただいた。

「おばさまは、数種のお雛様、三人官女や五人囃それにお雛様のお道具類を沢山おもちになっていました。毎年三月になると押入のお人形箱からお人形を大事にとり出して、久しぶりに会う人に話しかけるように挨拶しながら、一つ一つ丁寧に顔を絹のきれでふき、雛壇にかざって楽しんでおられました。御節句がすんで片づける時も、お一人で一つ一つの人形に、また来年迄と話しかけて仕舞って居られたのをよく覚えています。あのお人形やお道具類、今どこにあるのでしょうかね。」

気丈な八重夫人のやさしいしぐさとその情景が目にうかんでくるようないきいきしたお話しぶりに、おもわずひきこまれてしまう。

たまたま、その話題のお雛様に会う幸運に恵まれた。それは同志社女子高校校長として多くの貢献をされた末光信三先生のお宅にあり、ご子息の力作先生（工学部教授）がたいせつにうけついで、毎年かざっておられるということをふと耳にした。さっそく力作先生におたずねしてみると、「つぎの雛祭に見せてあげるよ」と言ってくださった。そして昨年の三月、賀茂教会の礼拝の後で、とうとう見せていただくことになった。

胸をときめかせて、そっと襖をあけると、お座敷の一角がはなやいでいる。細いお鼻のすずやかな顔だちで、とても美しいお雛様だ。きりっとひきしまって、なんともいえない気品がただよっている。これこそ新島先生ご一家の一部始終をみてきたお雛様だ。このお雛様をいとおしみながら眺めておられる八重夫人を、新島先生はきっとやさしくみつめておられたことだろう。明るい春の日射しがゆらめいて、そんな情景がうかびあがり、お二人の声が聞えてくるようだ。先生は八重夫人の少女時代の思い出話に耳をかたむけておられたかもしれない。ときには、先生の教え子が、およばれにあずかったこともあったろうか。八重夫人とお雛様の写っている黄ばんだ新聞やアルバムを見せていただきながら、お雛様と向き合っていると、同志社の歳月の移りかわりをみているようで、お人形にこめられている時間の不思議にひきこまれてゆく。

末光信三先生は、新島襄先生亡きあと、さびしそうにしておられる八重夫人を聖書研究会に誘って、いっしょに聖書を読み、ともに話し合うことで慰められたという。アルバムのなかには、その聖書研究会の写真もあり、

学生にかこまれた八重夫人が写っていて、そのそばに末光信三先生がひかえておられる。当時まだ小さかった力作先生は、八重夫人にかわいがられ、鞠をもらわれたこともあったとのこと。

子どものおられなかった八重夫人は、末光先生ご一家のあたたかいお心にたいし、大切にしていたお雛様をうけついでもらうことで、感謝の気持を表わされたのだろう。同志社女子高校時代の校長先生であった末光信三先生のお人柄に接し、個人的にもずっと尊敬していたわたしには、いかにもと深く納得するものがある。先生は不幸な状況にある人びとに、いつもやさしく援助の手をさしのべておられたからである。

八重夫人のお雛様その後（1988年3月）

力作先生は「この雛人形がぼくの家にあることは、あまり知られていない。武間夫人が『どこにあるんでしょうか』といわれて、河野さんが『存じません』と応えているくらいだからね」と、同志社時報にその記事がのっていることを教えてくださった。「この雛人形はずっとわが家で大切に伝えていきたいと思っている。」お二人のお子様のどちらが継がれるにしても、その次の代の跡継ぎもすくすくと育っておられ、お雛様の将来は安泰である。

同志社女子中学高校、同志社大学を経て、わたしは現在も大学の事務に勤めさせていただいているが、ふとしたきっかけで五年ほど前から人形に惹かれて、写真を写すようになった。すると、不思議に人形をめぐっていろんな方が心をひらいてくださり、珍しい人形に出会えるようになり、この幸運に恵まれることにもなった。はるか遠くの人に思えていた八重夫人が急に身近に感じられ、何ともいえない親しみがわいてくる。

わたしの雛人形は旅順に置き去りになってしまった。あの頃は人形どころではなかった。ところが、わたしに娘が生まれたとき、祖父が百年前フランスから持ち帰った人形がさまざまの変転を経て、娘のもとにとどいた。ボロボロになってはいたが、フェルナン・ゴーチェという名人の作だということが数年前にわかるなど、この人形にまつわる歴史がすこしずつ明らかになり、人形というものに無関心ではいられなくなった。人形を通して、時代の様子やそれをとりまく人びとの心が、ふっと見えてくるような気がするからだ。

人形の運命もまたさまざまである。それだけに、激しく時代の変転するなかで、お雛様を持ちこたえてこられたことは、並大抵のことではないと思う。お雛様のかたわらには、今は亡き末光信三先生と奥様の信子先生のお写真がほほえんでおられ、話題のお雛様は今も幸せそうに健在であった。

（大学神学部事務室職員）